2010 年 7－8 月展示
ジャン＝ジャック・ルソー『エミール』初版本

ジャン＝ジャック・ルソー(Jean-Jacques Rousseau)は、1712 年にジュネーヴで生まれ、フランスで活動した思想家、文学者です。『人間不平等起源論』や『社会契約論』では民主主義理論を唱えてフランス大革命の先駆者と言われ、『新エロイーズ』などの文学作品などではロマン主義の父と言われています。

『エミール』（副題：「または教育について」）はルソーが 50 歳の時に刊行され、近代教育学の古典のひとつに数えられています。文明社会に歪められることのない自然人の理想を目指して、エミールという名の架空の生徒がどのように育てられていくかを物語風に描いた作品です。また『エミール』は自由主義教育論であると共に、ルソーの宗教観、社会観、道徳観を含んでおり彼の思想の頂点をなす作品とも言われています。しかしこうした著作は当時の権力者にとっては大胆な挑戦と捉えられ、出版後まもなく禁書とされルソーはその後漂泊の旅を続けました。死後に刊行された自叙伝『告白』では赤裸々に自己が語られています。

再来年は、ルソー生誕 300 年にあたりますが、立教大学図書館所蔵の『エミール』初版本（1762 年デュシェーヌ版）を展示します。

立教大学図書館

「人間は自由なものとして生まれている。しかも、いたるところで鉄鎖につながれている。自分が他の人々の主人であると考えている者も、彼ら以上に奴隷なのである。（『社会契約論』）

「祖国は自由なしに、自由は徳なしに、徳は公民なしに存在できるものではない。」

（『人間不平等起源論』）

「われわれは弱いものとして生まれ、力を必要とする。われわれは何も持たないで生まれ、助けを必要とする。われわれは愚かなものとして生まれ、判断力を必要とする。生まれるときにはもたず、大人になって必要なすべてを、われわれは教育によって与えられる。」（『エミール』）

＜展示資料＞

Émile, ou, De l'éducation / par J.J. Rousseau
Amsterdam : Jean Néaulme, 1762.　4v. : ill. ; 17cm　(12mo)

参考資料

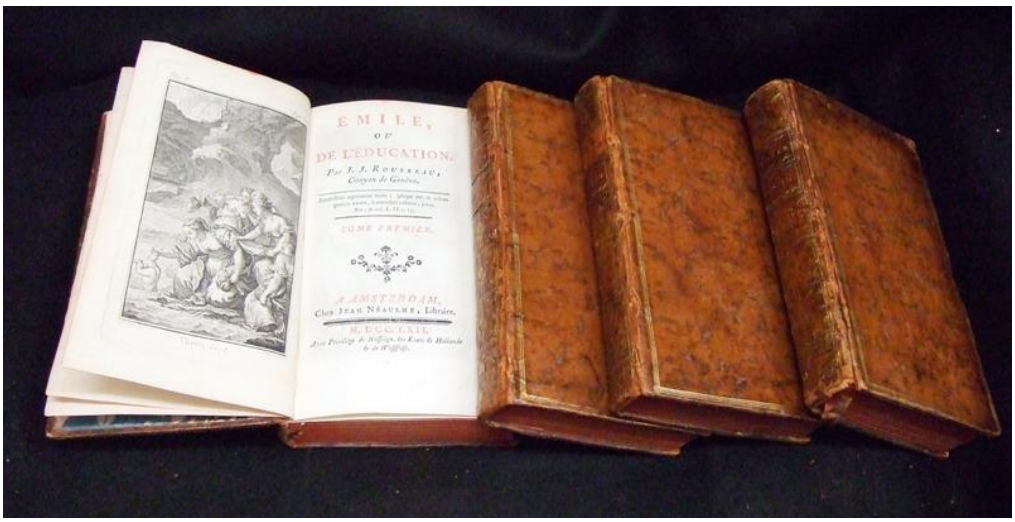
『エミール』ルソー著　今野一雄訳　上中下 3 巻（岩波文庫）1962
『ルソー』桑原武夫編　岩波新書　1962
『ルソー全集』　全 8 巻　樋口謹一訳　白水社　1980
『ルソー』福田歓一著（人類の知的遺産 40）講談社 1986
『ジャン＝ジャック・ルソー論』吉岡知哉著　東京大学出版会　1988
『ルソーの教育思想』坂倉裕治著　風間書房、1998 年
『フランスにおけるルソーの「告白」』桑瀬章二郎著　シャンピオン　2003
Les Confessions de Jean-Jacques Rousseau en France. Campion, 2003
『思想』1027 号　2009 年　11 月号
特集：ジャン=ジャック・ルソー問題の現在--作品の臨界をめぐって
吉岡知哉 “エミールとそら豆”
坂倉裕治 ”日本の近代化と「エミール」“
桑瀬章二郎、吉岡知哉、坂倉裕治、王寺賢太”座談会：ルソーの不在、ルソーの可能性”

『エミール』の初版本について

立教大学文学部教授　坂倉裕治

『エミール』の初版本を認定するための基準については、長い期間にわたる調査研究の蓄積がある。ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-78) の書簡集を粘り強く編纂したことで知られる研究者デュフール (Théophile André Dufour, 1844-1922) の遺稿として見つかった詳細なルソーの著作目録と解説が、編者によって該当する原典のタイトルページなどが図版として付されて 1925 年に刊行されたのは画期的であった。しかし、後に、その記述には重大な誤りが含まれていたことがわかっている。今日なお、未解決のまま残された問題もある。研究者たちの足跡をたどる旅は、文献研究の難しさと魅力の一端をあらためて教えてくれるように思われる。

今日までに明らかにされた事柄について整理してみよう。『エミール』の正規の出版元となったパリのデュシェーヌ (Nicolas-Bonaventure Duchesne, ?-1765) とアムステルダムのネオーム (Jean Néaulme, 1697-1780) は、製作費用を案分し、フランス国内での独占販売権を前者が、フランス以外での販売権を後者が取得した。まぎらわしいことに、パリ版もアムステルダム版も、どちらも発行者をネオームと記している。『エミール』には、原罪説などカトリック教会の主要な教説を否定したり、教会の権威をおとしめたりする記述が含まれていたので、デュシェーヌはフランスでの検閲をのがれるために、タイトルページの発行者をオランダのネオームと記して、パリで秘密裏に印刷を始めてしまう。パリ版は 8 折判とやや小さめの 12 折判の 2 種類があり、基本的に本文には同じ組版が使用されていたが、前者は発行地をル・ハーグ (La Haye)、後者はアムステルダムと記している。ネオームは内容を十分に認識することなく契約を結んでいたようで、全四巻本の第三巻の校正刷を受けとると、自然宗教論「サヴォワの助任司祭の信仰告白」を読んで驚いたと書簡にしたためている。オランダ当局から訴追されたネオームは、「清浄された (purgée)」版本をあらためて出版することを約束して恩赦を受ける。ベルリン在住の哲学者フォルメー (Johann Heinrich Samuel Formey, 1711-97) によって「疑義がある部分」に註記が付され、「著しくキリスト教に反した部分」が削除されたり別の文章と置き換えられた『キリスト教徒のエミール』が 1764 年にネオーム書店から出版されている。フォルメーの註記には誤植や誤記に関するものもあり、書誌学上貴重な手がかりとなる。



以上を整理すると、正規の初版本は次の 3 点ということになる。

A. パリでデュシェーヌによって印刷された 8 折判、発行地表記ル・ハーグ

B. パリでデュシェーヌによって印刷された 12 折判、発行地表記アムステルダム

C. アムステルダムでネオームによって印刷された 8 折判、発行地表記アムステルダム

発行地をル・ハーグと記したパリ版の 8 折判 (A) が 12 折版 (B) よりも先に印刷されたとみる説が有力である。8 折判初版初刷では、第一巻と第三巻のタイトルページのほぼ中央、ストア派の哲学者セネカの『怒りについて』からとられたエピグラフのなかで、原文では“genitos natura”であったのを誤って“natura genitos”と引用している。この間違いは増刷および 12 折版では訂正されている。また、第四巻の末尾に置かれた正誤表が、12 折版では直前の特許につづけて同じページに印刷されているのに対して、8 折版では独立した別のページに印刷されており、後から挿入されたとみられる。しかし、12 折版にのみ認められる誤植も指摘されており、本文の一部については 12 折版が先に印刷された可能性も否定できない。

パリ版とアムステルダム版の間には、いくつかの相違が存在することが知られている。「契約」に基づいて、デュシェーヌはパリで組まれたはじめの 2 巻分の校正刷を現著者ルソーとネオームとに送っており、少し遅れてネオームはパリ版の校正刷をもとに組まれたアムステルダム版の校正刷をルソーに送っている。奇妙なことに、ルソーは、デュシェーヌに戻した校正刷に添えた 4 箇所の削除の指示をネオームには送らなかった。したがって、当該箇所が削除されていなければ、アムステルダム版系統の版本である可能性が高い。

これまでみてきた正規本初版初刷に加えて、増刷、再版本、さらには海賊版が存在することにも留意が必要である。著作権についての考え方が、今日とは大きく異なっていた時代である。著者の了解なしに版元が増刷したり、正規の出版契約を結ぶことなしに無断で書物を作成販売したりすることは珍しいことではなかった。とりわけ、当時の西ヨーロッパ地域において、いわゆる上流階級の人々、教養ある人々の間でフランス語は共通言語であったので、フランス語で書かれた売れ筋の書物は、しばしば著者に無断で複製されたのだった。たとえば、海賊版の作成を手がけていたリヨンの書店主ブリュイゼ (Jean-Marie Bruyset, 1719- 97) とデュシェーヌとの間で、ネオームに対するのとほとんど同じ内容の契約が交わされていたことは、ルソーもネオームも知らなかった。発行地アムステルダム、発行者ネオームと記した 12 折版の「リヨン版」は、パリ版とほとんど同じ時期に現れている。海賊版、偽版を含めると、1762 年という出版年を記した『エミール』の版本は、14 系統 19 種類が識別されている。識別の手がかりは、装飾の有無や図柄、誤植の有無、欄外の印刷製本上の指示の有無、白紙の有無や位置といったページの割付の違いなど実に様々である。

今回、展示される立教大学の所蔵本は、発行地をアムステルダム、発行年を 1762 年と記す 12 折版である。タイトルページの装飾、ノンブルの誤植、印刷製本上用いられる記号などの特徴から、デュシェーヌがパリで印刷した初版初刷 (B) であると判断される。

参考文献

Correspondance complète de J-.J. Rousseau, 52 vol., Genève, Institut et Musée Voltaire et puis Oxford, Voltaire Foundation, 1965-98.

Th.A.Dufour, *Recherches bibliographiques sur les œuvres imprimées de J.-J. Rousseau*, Introd. de P.-P. Plan, Neuchâtel, Bibliothèque de la ville, / Paris, L. Giraud-Badin, 2 vol., 1925.

J.-A. McEachern, *Bibliography of the writings of J.-J. Rousseau to 1800*, Oxford, Voltaire Foundation, 2 vol., 1989-93.

P. H. Muir, "The First Edition of Rousseau's *Emile*, 1762", *The Book Collector*, 1952, Vol. 1, No.2, pp.67-76.

ジャン＝ジャック・ルソー「エミール」初版本の挿絵について

立教大学総長（法学部教授）吉岡知哉

『エミール』初版本には５葉の銅版画が挿絵として挿入されている。これらの挿絵は、本文中でルソーが言及するギリシア神話に対応している。挿絵の解説と、挿絵に対応する『エミール』本文の当該箇所を以下に記す。

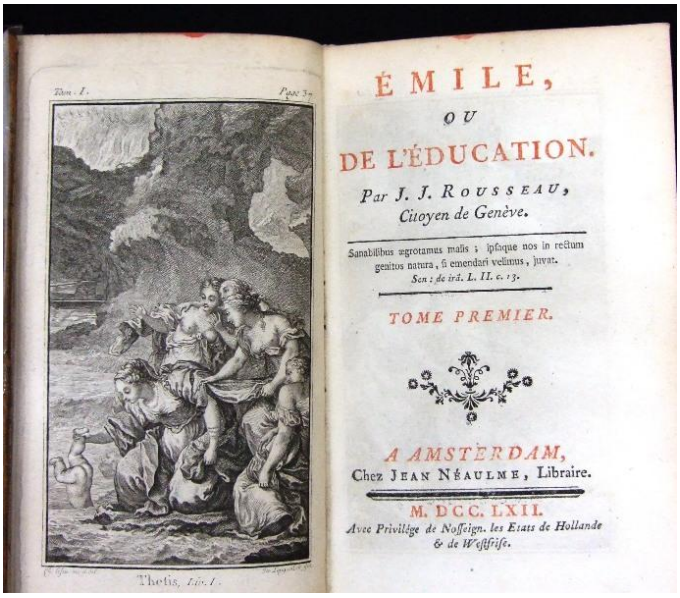
なお翻訳は樋口謹一氏によるもの（『ルソー全集』（白水社））であり、同全集の巻数とページ数を示す。ギリシア神話については、高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』（岩波書店）を参照した。

<1>アキレウスの母である海の女神テティスが、息子を不死にしようと考えて冥府の河ステュクスに浸している場面。

このとき、テティスはアキレウスの踵を持っていたため、踵だけが水につからず、アキレウスは不死にならなかった。トロイア戦争の時、アキレウスはパリスが射た矢を踵に受けて死亡する。

［本文との対応］（第１篇　『全集』第６巻３２頁～３３頁）

第１篇のはじめの部分で、ルソーは、同時代の母親が子育てを行わなくなっていることを自然に反すると批判する（フェミニズムからのルソー批判の論点の一つである）。同時に、母親による過保護が子供を柔弱にし、かえって子供の将来の危険を増すことになると指摘する。テティスがアキレウスをステュクスに浸けたという物語は、幼い頃から子供を鍛える必要があるという文脈で用いられている。



「テティスは、自分の子アキレウスを不死身にするために、寓話によれば、冥府のステュクス川の水にひたした。この話しの意味するところは美しくかつ明らかだ。私がいま語っている残酷な母親たちは別のやりかたをしている。子どもを柔弱さにひたすことによって、苦痛の未来をあたえてやり、子どもの毛穴をあらゆる種類の病にあけてやって、大きくなったときかならずやそうした病の餌食になるようにしむけているのだ。

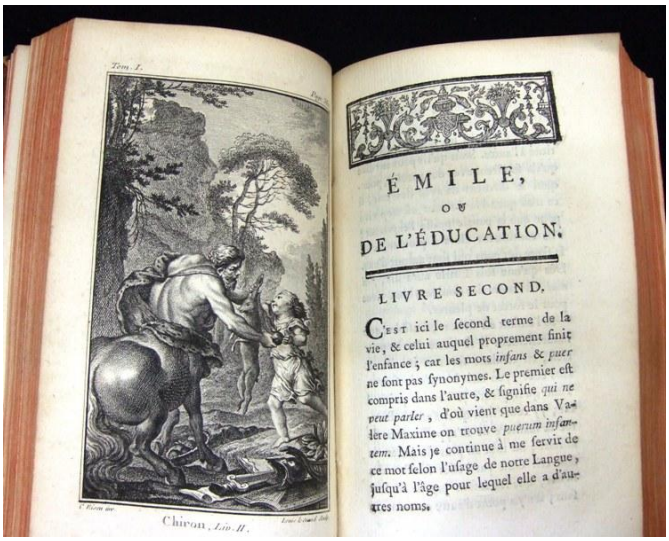
［中略］子どもがいつか耐えねばならない打撃の訓練を子どもにしてやりなさい。季節、風土、環境の苛酷さに、飢え、渇き、疲労に対して体を鍛えてやりなさい。ステュクス川の水につけなさい。」

<2>半人半馬のケンタウロス族の賢人ケイローンが、幼いアキレウスに競走を押している場面。

アキレウスの母テティスは息子を育てなかったので、父ペーレウスがケイローンに預けた。アキレウスは俊足で知られる。

ケンタウロスは野蛮であるとされるが、ケイローンは賢明で正しく、音楽、医術、狩り、運動競技、予言の術に優れている。

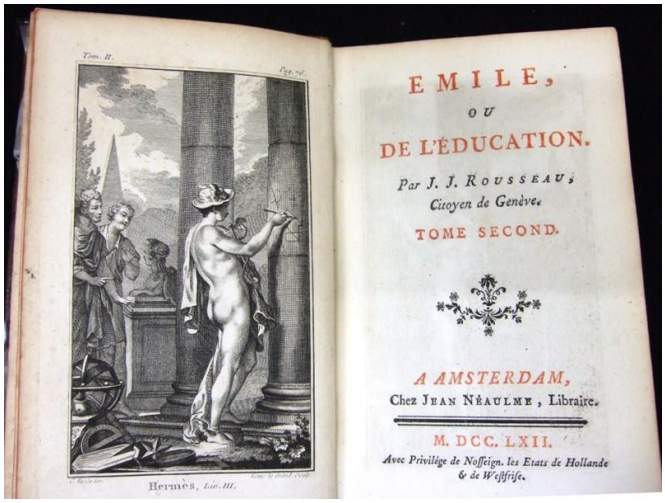
［本文との対応］（第２篇　『全集』第６巻１７８頁）
　十歳ころの時期に、子どもの五感の発達を促し、体を訓練する段階が訪れる。ここでルソーは、不精で怠惰な子どもに駆けっこの訓練をした経験談を記している。



「どうしたわけかわからないが、自分のような地位の人間はなにもなすべきでなく、なにも知るべきではない、貴族としての身分は腕の力、脚の力、その他あらゆる種類の能力の代わりになってくれるべきだ、と彼は確信していた。このような紳士を速足のアキレウスにすることはケイロンの巧妙さをもってしても十分ではなかったろう。」
　ルソーは、お菓子を賞品にするという方法で、子どもに競走をするモチベーションを持たせる。

<3>ヘルメースが諸学問の基礎知識を石柱に刻んでいる場面。
　ヘルメースはゼウスの末子でオリュンポス１２神のひとり。神々の使者であり、すばらしい知恵と技術とを持つ。富と幸運の神であり、商売、盗み、賭博、競技、旅の保護者である。アルファベット、数、天文、音楽、度量衡などの知識のほか、竪琴、笛も発明した。ちなみにヘルメースは、ペタソスという鍔の広い旅行帽をかぶり、ケーリュケイオンという杖を持ち、翼のついたサンダルをはいた美青年として描かれる。

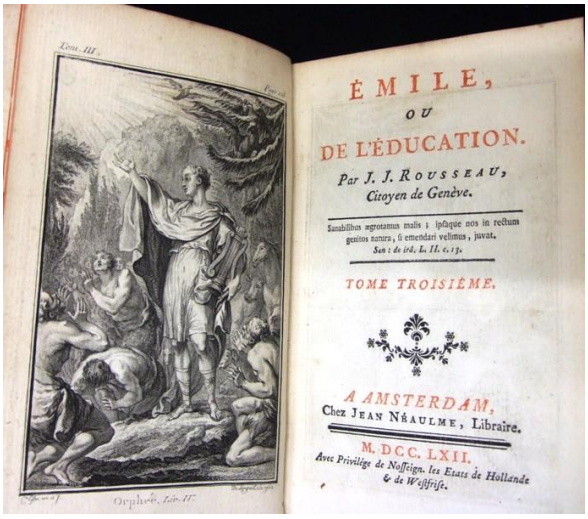
［本文との対応］（第三篇　『全集』第６巻２４２頁）
　１５歳ころの子どもに知識を教えるにあたって、ルソーは、それらの知識が「役にたつ」ものであることを、子どもにわからせることが必要であると強調する。モンモランシの森で道に迷ったエミールは、太陽の位置から方角を知るという経験によって天文学の有用性を知る。理解できない観念を説くことには意味がないとルソーは言う。



「私は書物を憎む。書物は、知らないことについて語ることだけを教える。ヘルメスは初学の基礎的原理を石の柱に刻印して、自分の発見を大洪水からまもろうとした、とのことだ。彼がこれを人間の頭に刻みつけたら、それは伝統によって保存されたことであろう。十分訓練された頭脳は、人間の知識をもっとも確実に刻印しうる記念碑なのである。」

<4>詩人であり音楽家であるオルペウスが、人々に宗教を伝えている場面。
　オルペウスはホメーロス以前の最大の詩人、音楽家であるとされる伝説上の人物。竪琴と歌の名手であり、彼の歌には野獣も草木も聞き惚れたという。
　オルペウスは蛇に噛まれて死んだ妻エウリュディケーを追って冥界に下った。彼の歌を聴いた冥界の王ハーデースと妃ペルセポネーに許されて妻を連れもどす途中、誓いを破って後ろを振り返ったために、エウリュディケーは冥界に引き戻されてしまった。古代ギリシアの秘教オルペウス教の創始者とされる。

［本文との対応］（第４篇　『全集』第７巻６３頁）



『エミール』第４篇はそのなかに、「サヴォアの助任司祭の信仰告白」と題するやや独立した文章を含んでいる。そこには、ポー川のほとりの丘の上で、助任司祭が「私」に説いた、宇宙の秩序と神の存在についての考察、そして「神は私に、善を愛するようにと良心を、善を知るようにと理性を、善を選ぶようにと自由をあたえている」という自覚について述べられている。ルソーの「自然宗教」と呼ばれるものである。

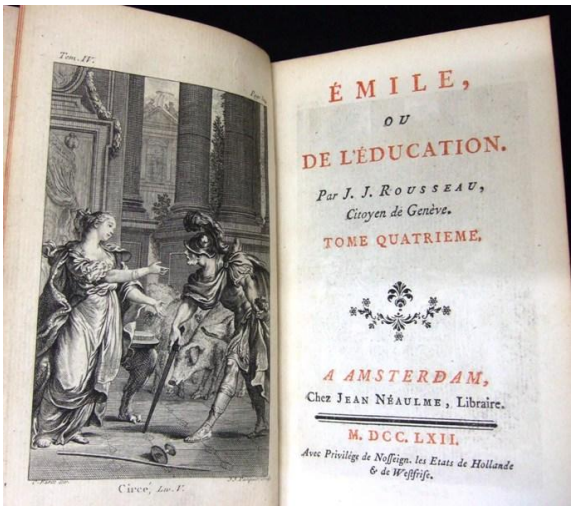
以下は、その「信仰告白」の中程で、助任司祭の話が途切れたところの文章である。

「善良な僧侶は力をこめて語った。彼は感動しており、私もそうだった。私は神にひとしいオルフェウスがはじめて讃歌をうたい、人間に神を崇めることを教えるのを聞くかのように思った。しかしながら、私には彼に反論すべきことが数多く見てとれた。だが一つも反論しなかった。」

<5>魔女キルケーが、豚に変身させることができなかったオデュッセウス（ユリシーズ）に屈服する場面。

キルケーはアイアイエー島に住み、人間の男を家畜に変えて暮らしている。オデュッセウスの仲間は酒を飲み豚に変えられてしまうが、オデュッセウスだけはヘルメース神から得た魔除けの霊草モーリュのおかげで変身させられず、逆に仲間を人間に戻して救い出す。その後、オデュッセウスはキルケーに魅せられてこの地に１年間留まった。

［本文との対応］（第５篇　『全集』第７巻２９０頁）



『エミール』第５篇は、「ソフィ、または女性について」という女性教育論と、青年期に達したエミールとソフィの恋愛物語によってなりたっている。フェミニズムからの強い批判がなされることでも有名な部分である。

親方のもとで働いているエミールの仕事場にソフィと母が訪ねてくるというエピソードの後に置かれているのが以下の文章である。

「ソフィが愛の生む真の配慮について寛大であるのではない。反対に、強圧的で、要求も多い。ほどよく愛されるくらいなら愛されないほうがましだと思っている。自分の美質に高貴な誇りをもち、自分を意識し、自分を重んじ、自分が自分を敬っているように敬われたいと思っている。彼女の心の全価値を感じ取れず、彼女の魅力と同じくらい、いやそれ以上に彼女の徳のゆえに彼女を愛しないような心をさげすむ。彼女よりも自分自身の義務を優先しないような、それ以外のものならすべてに彼女を優先しないような心をさげすむ。彼女のおきて以外におきてを知らぬ恋人はもちたくない。彼女は男性を彼の心をゆがめはせずに支配したい。オデュッセウスの道連れどもをいやしい動物に変えたあとで、キルケーは、彼らをさげすみ、ただ一人変えられなかったオデュッセウスに身をささげたのも、そうだったのだ。」

『エミール』思考のブリコラージュ

立教大学文学部准教授　桑瀬章二郎

『エミール』という書物を魅力的かつ恐ろしく難解にしているのはその雑種性であるといえる。この書物を初めて手に取る読者は必ずこう感じるはずだ。すべてがグダグダであると。作者ルソーは興の趣くままにペンを走らせ、関心ある主題には立ちどまり、逆に難解な主題については都合の良い断定ですませ、しかも自らの考察をなんの脈絡もなしに継ぎ接ぎしていくようにみえる。母親の役割、言語習得、身体の鍛錬、富や所有の観念の習得、職業の選択、そして学課や読書、宗教・・・こうした教育に関するさまざまな論点をルソーはもれなく取り上げ、まったく自由に論じ、これでもかとてんこもりにしていくのだ。もちろんそこには、政治体についての考察（『エミール』が『社会契約論』とほぼ同時期に出版されたことは決定的な意味を持っている）、そして隠遁＝定住の知識人というイメージに反し、絶え間なく移動する作家であったルソーの面目躍如たる旅行論、さらにはデカルトを片手に感覚論哲学（コンディヤック）、唯物論哲学（ディドロ）の狭間を猛スピードで駆け抜ける「サヴォワの助任司祭の信仰告白」という挿話をも付け加えねばならないだろう。こうした議論が、厳密な理論的体系的論述の形を取ったかと思うと、突然弛緩したような物語形式となり、さらには読者へのアイロニカルな呼びかけ、次には挑発的な論争の警句となって積み重ねられていくのだ。

教育に関する主題をもれなく扱おうとするルソーが、その時代には論じることが極めて困難であった、だが彼自身は教育論の中心的主題となりうるものとみなしていたある一つの視点に、特別な場所を与えていることは偶然ではない。性（セクシュアリティー）がそれである。今日でさえ生真面目な論者によってしばしば都合よく消去されてしまうこの主題に、『エミール』のルソーは否定しようのない重要性を付与している。ルソーは、『告白』という自伝で、一人の人間の形成に性（セクシュアリティー）がどのような役割を果たしているか、ほとんど精神分析家のような視点から検討しえた作家である。エミールという架空の青年の成長過程を辿るルソーが、この主題を忘れるはずがない。

こうしてルソーは大真面目で「欲望」の生成について語りはじめる。ところがここでもすぐさま彼の語りはグダグダになってしまうのだ。たとえば語り手は青年となったエミールにソフィーなる架空の女性を「与え」ようとするのだが、この（少なくともエミールにとって）理想の女性をめぐるルソーの論述は錯綜し、哲学的論述は空想的な小説へと逸脱していくようにみえる。そもそも、なによりも貞淑で非の打ち所がない女性をルソーが持ち前の想像力を遺憾なく発揮しながら小説家の筆致で描き出すときほど、彼の思考が危険な倒錯的世界に接近するときはない。主－従関係の逆転につぐ逆転の息苦しい物語は、「自然な」性関係など実は存在せず、それを完成された人為として生きることが近代人に残された唯一の選択肢であるというルソーの悲観的なメッセージであるようにさえみえる。

近年、ポストモダニズムへの反動から、『エミール』を精緻な理論的著作として読み直そうとする「哲学的」解釈が影響力を持ちはじめている。しかしまずはこの書物の言いようのないグダグダ感を楽しむべきではないだろうか。